

マタイによる福音書2章1節—12節

『喜びにあふれて』

イエス・キリストが降誕されたとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムにやってきました。東の方とは、ペルシアとか、バビロニアといった地域を指していますが、それらの国々では星を見て、さまざまなことを研究することが盛んにおこなわれていました。学者と訳されている言葉は、博士たちと訳されてきた言葉で、その方がなじんでいる人もいるでしょう。学者たちとは何人だったのか。聖書には人数は書いてありません。贈り物が三つだったので、三人の博士、ということになったのですが、実際は何人だったのか。もう一つ気になるのは、年齢です。いったいいくつの人が、わざわざ遠い国から旅してきたのでしょうか。ざっと考えて1000キロにはなろうという距離です。星を研究する学者たちは東の国にはたくさんいたのですが、エルサレムにやってきたのはこの人たちだけです。学者たちは一つの星を見上げて新しい王の誕生の時を知り、単に研究にとどまらず、実際旅立って、はるばるエルサレムまできて、生まれたばかりの救い主を拝んだ、すごい人たちだと思います。ただ、研究してああだこうだ、と知っているだけでなく、自分たちの足で歩き、やってきたのです。

彼らはエルサレムの宮殿にやってきて、こう尋ねます。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

ということは、この学者たちは救い主が生まれる「時」は知っていたけれども、「場所」は知らなかった、ということになります。宮殿では新しい王の誕生など何も知らされていない、新しい王など生まれてもいない。無視して終わり、でもいい話です。しかしヘロデ王は心がざわつくのです。遠い国からわざわざやって来て、こんな問いを自分にする学者たちの言葉が無視できない。

ヘロデは王さまです。しかし、彼は当時ユダヤを支配していたローマ帝国によって任命された王でした。つまり雇われ王という立場でした。いつでも首を挿げ替えられる王なのです。彼のこころの中にたくさんの不安がありました。

彼はとても猜疑心の強い人で、自分の妻や、息子まで、自分の地位を脅かすものとして殺してしまう人でした。こうした王の不安はエルサレムに住む人々にも伝染したでしょう。エルサレムの人々も不安になっていった。ヘロデ王は、祭司長や律法学者を呼び、メシア・救い主はどこに生まれることになっている

のか、と問いました。

祭司長たちは、「それはユダヤのベツレヘムだ、」と応えます。もっともこのことは事新しいことではなく、当時人々の間で、救い主はベツレヘムで生まれる、ということは周知のこととして、期待されていました。

では、どうしてエルサレムの人たちは、場所がわかっているのに、救い主を拝みにベツレヘムに行かなかったのか。それは場所はわかったとしても救い主がお生まれになる「時」がわからなかったからです。彼らはキリストがお生まれになる場所は知っていたとしても、その時は知らなかったのです。

キリストと出会ううえで決定的に大事なことは、時だということが、わかるのです。その時を逃してしまっはいけない。学者たちは、その時を知らされて、その時の大事さを受けとめて、はるばる遠くの国から、やってきた。一方ユダヤの人々は、せっかく生まれる場所を知りながらも時を見定めることができず、結局救い主の許にはだれ一人行かなかった。

けれど、誕生の時を知らせたあの星は、時を知らせてくれただけではなかった。その星は学者たちを導き、先立って進み、幼な子のいる場所の上にとまった、というのです。星は時だけでなく、場所も彼らに示したのです。

学者たちが星の示す「時」を受けとめ、今、救い主に会いに行こうと、決断し、実行した、その歩みの中で場所も示されていった、ということに注目する必要があります。

学者たちはわざわざ、エルサレムの宮殿に行って、ヘロデに生まれる場所を尋ねたのですが、実際にはその必要はなかった。彼らは場所を知らなくても、時を教えてくれた星に従っていけば、幼子のいる場所に導かれていったのです。

星の導き方は、学者たちに、まず、今という時の大切さを示した。今彼らが決断して救い主と出会い、救い主を拝む、今という時の大切さを示した。場所の問題はその後に、添えて与えられた、そういう導き方です。つまり、時と場所、ということを含めると場所は時に比べれば、二義的だ、ということです。ときの大切さに比べれば、場所は一番ではない、ということです。

わたしたちが真実に生きようとすれば、問われるのはまず、今という時をいかに生きるか、ということであって、どんな場所で生きるかではない、ということです。星の導き、ということから見れば、キリストと出会うために一番大事なことは、今の時を知って、その今を生きることだということです。

わたしたちは、「場所」ということにずいぶん拘束されたり、拘泥するもので

す。住む場所、学ぶ場所、働く場所、生活する場所。人と会う場所。

恵まれた場所、というものがあって、恵まれていない場所があって、良い場所があって、悪い場所がある、と思っている。

あの人は恵まれた場所、恵まれた地位にあり、恵まれた環境という場におかれている。それに比べて、わたしは恵まれていない場所、恵まれていない地位、だからわたしは、この場所では自分の能力も十分に発揮できないし、自分らしさもあらわせない。場所がよくないのだ。

自分が置かれている場に、拘束されている自分、拘泥している自分。

場所がわたしたちにとって大事なことは言うまでもない。

だが今日の聖書が語るのは、時の大切さに比べれば、場所は決定的ではない、ということです。場所の問題は、目に見えることが多いし、実感できる場合も少なくない。だから勢い、問題は場所なのだ、と思いがちなのです。それに比べれば、時は、見えない。星の研究をしていた学者たちが大勢いたにもかかわらず、エルサレムに来たのはこの人たちだけ、というのはいろいろな理由が背後にあるにせよ、「時」の受け止め方は一様ではないことを物語っています。

例えば、よく「あの時は今振り返ってみれば、家族にとってとても大事な時だった。」というような言い方をします。その場合のあの時、という時はその時にはそうはなかなか受け取れなかった、ということです。今にいなればあの時は大事だったというけれど、その時には、そうは受けとめていなかった、ということです。

ときをどう受けとめて生きるか、それは場所の問題よりももっと深い問題、ということが今日の聖書箇所では語られているのです。

学者たちは、今を救い主誕生のその場に行き、そこで礼拝するときとして受け取り実行したのです。その今の生き方がここに示されているのです。

場所の問題は、大きい。客観的に見て、良い場所とか、悪い場所、というのはあるのでしょうか。しかし、仮にどんなに悪い場所にいるとして、そこで今を生きることに心注いでいくのなら、キリストと向き合い、今を精いっぱい生きるのなら、いのちは輝く。また逆に、どんなに恵まれた場所にいても、今という時を生きることに心を注いでいかないのなら、いのちは褪せていく。

それはだから悪い場所でもがんばれ、という話ではない。今を大事に生きるということに心が向いていくなれば、場所の問題は、その中で考えていけばいい、ということです。場所を変わることも、留まることも今を生きるということの中で考え決断していけばいいのです。

人生においては、どこで生きるか、ということは実は決定的なことではない

のです。そのことをわきまえて、時を大切にするならば、人はそのまま、与えられたいのちを燃焼させていると言えるのです。

「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、当方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所にとまった。家に入って見ると、幼子は母マリアと共におられた。彼らひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰っていった。」

学者たちは幼子の救い主をひれ伏して拝んだ。それは救い主の誕生の知らせの中で彼が今という時に一番しなければならないと思い定めたことでした。今キリストを礼拝する。それが最も大事なことだ。そして自分の持てる宝を救い主に献げる。献げる生き方、それは救い主という恵みをいただいた者の応答的生き方です。ヨセフはこの子はインマヌエルと呼ばれるということを聞いたのでした。これからはずっとキリストと一緒に、ということです。その恵みを受けて奉げていく、仕えていくのです。彼らは別の道を通して帰った、というのですが、それ来た時の道とは違う生き方を彼らが始めた、ということを示唆する言葉です。

今という時をわたしたちはどう大事に生きるのか、思いを凝らしたいと思います。